

Paola Cagliari, Marina Castagnetti, Claudia Giudici, Carla Rinaldi, Vea Vecchi, Peter Moss (編著)  
**Loris Malaguzzi and the Schools of Reggio Emilia:  
a selection of his writings and speeches, 1945-1993**  
2016年 Routledge B5判 450頁 定価 (€42.50=5500円)

**Kerekes Zsuzsa**<sup>\*</sup>

1980年代から、イタリアのレッジョ・エミリア市の乳児保育所と幼児学校は、世界中の注目を集めている。レッジョ・エミリアの好評は、心理学者であり、教育者のローリス・マラグッツイの45年に渡る汗と努力の賜物である。現在も、イタリアに足を運んでレッジョ・アプローチを学び、それを自国で実際に応用している教育実践者および教育学者はたくさんいる。国際的に関心が高いため、世界中でレッジョ・エミリアの経験を伝えるために「レッジョ・チルドレン」という研究機関が作られた。「レッジョ・チルドレン」は英語版の本を数冊出版している。また、一番広く読まれている“The Hundred Languages of Children”という著書は『子どもたちの100の言葉』というタイトルで、日本語にも翻訳された。この他にも、レッジョ・エミリアの教育者が出した、英語で読める本が数冊ある。ただし、今まで、マラグッツイ自身の言葉はイタリア語でしか読むことができなかった。この書評の対象となる本書の出版により、マラグッツイが残した大量の資料から100以上の記述は、世界中の読者からアクセスできるようになった。

読者が初めてこの本を手にとると、学術論文、学会発表や講演のような文章を期待するかもしれないが、実はこの著作集はより多様なものからなる。スピーチを始め、新聞記事、親や市長への手紙、インタビュー、ゼミナールプログラム、本の章のドラフト、詩、メモなどが収集されている。イタリア語のオリジナル版は「レッジョ・エミリア ワーキンググループ」より収集、選択されている。このワーキンググループのメンバーは、編集に携わり、レッジョ・エミリアの学校で長年活躍してきた、あるいは学校と関わってきた、そしてマラグッツイをよく知っている Paola Cagliari および Marina Castagnetti, Claudia Giudici, Carla Rinaldi, Vea Vecchi である。選択されたテキストを Jane McCall が翻訳し、この文章を形にしたのは序説も担当している英語版の編集者の Peter Moss である。Peter Moss は University College London の教育研究所に属し、幼児教育を専門としている名誉教授である。

本書は、5章からなる。第1章では、初年から1963年まで、マラグッツイが教育に関わり始めた時期の文章が載っている。マラグッツイはレッジョ・エミリアで6年間の小学校、中学校の教師として勤めた後、大学で教育学、臨床心理学と教育心理学を勉強し、新聞編集者を4年間勤め、その後レッジョの心理-教育メディカルセンターで20年間心理学者として活躍していた。この時期のマラグッツイの著作をみるとデモクラシーを心がけ、あらゆる人間の文化に参加する権利への関心が読み取れる。政治的なディベートへよく参加し、様々な問題を社会的次元とその解決に興味があったと言える。共産党への批判でも、文化的問題を無視している傾向があるということを強調した。民主主義的な考え方は、アマチュア演劇へのサポート、または階級に関わらず、市民が安く演劇が見られるように計画していたことから明らかだ。心理学者として心理に関わる医療機関の子どもに関する古い考え方と学校の機能の欠如を批判していた。マラグッツイは、この時期からずっと、子どもはタブララサではなく、様々なリソースを持って生まれてくる人間

\* お茶の水女子大学大学院博士後期課程

だと主張している。

第2章では、60年代の後半に移り、レッジョ・エミリアの学校が発展し始める時期に生まれたテキストを集める。マラグッツイは、この時期に主にヴィゴツキー、エリクソン、ベッテルハイム、モンテッソーリ、ピアジェの理論を取り上げ、現場で研究し続けながら、教師および親にもゼミナールを開いた。この時期、マラグッツイが最も着目したのは、新しく作った *scuole dell'infanzia* (3-6歳児の学校、複数形) のアイデンティティをできるだけ早く確立し、その特徴と良さを *comuni* (地方自治体、複数形) に知ってもらい、自治会からのサポートを得ることだった。また他の文章から読み取れるのは、美しく、文化を表している学校建物への関心である。そして、1969年にレッジョの特徴である *atelier* (芸術ワークショップ) のアイデアが初めてマラグッツイの中で生まれた。

第3章は、1970年代のマラグッツイの著作を紹介している。1970年になると、マラグッツイは正式にレッジョ・エミリアの *scuole dell'infanzia* のペダゴジスタの長になった。*Atelier* と *atelierista* (芸術を専門とする教師) を確立し、演劇、音楽、操りなどのパフォーマンスアートを学校へ導入した。国内を旅行したり、学会へ参加したり、ゼミナールを開いたりすることなど、参加者と交流を持ち続けた。60年代から興味を持っていた子どもと環境の関係を検討し、子ども、親はどのように学校やその空間と接するかと検討していた。またこの時期のテキストではカトリック教会とのディベートも追うことができる。マラグッツイの世俗的な *scuola dell'infanzia* は過去の幼児教育を支配するカトリック教会に批判され、その批判への反応は様々な形で文章の中に現れる。この10年間でマラグッツイが想像した学校のイメージが明らかになる。一過去にははっきりと分離された学校と家族、教育の場と社会、教師と親、教育学と政治、という要素が同じスペースに共存しているような学校のビジョンを抱いていた。これらのつながりを強めるために、レッジョの学校を市民に解放し、展覧会などを開催し始めた。また、学校の教育者と教育者ではないスタッフの間にある不平等をなくそうとし、大人と大人の間関係を見て子どもが社会性を身につけられるように、その関係を見直し、見えるところに置く必要があるとマラグッツイが主張した。

第4章では、レッジョ・エミリアが世界へ出て自分の経験を他国と共有するようになり、国際的に認められるようになった。マラグッツイは、65歳になり、理事長を退職したが、その後、国内外でもレッジョの教育活動に関わっていた。マラグッツイがこの時期の著作で目立つトピックは、レッジョ・エミリアが作った「子どもたちの100の言葉」という展覧会だった。その次にマラグッツイがよく触れるテーマは、科学的発展の課題だった。特に神経科学、生態学および情報科学の発展に興味を持つようになった。そして、この時期でも親と市民の参加を促進させる意志がスピーチの中で反映されている。また、子ども期の正常化の重要性についても熱く語っている。そして、教育の上で、子どもの発達のはやさを気にし過ぎるより、子どもたちのクオリティ・オブ・ライフに重点を置くべきだと述べている。

第5章では、マラグッツイの晩年の3年を語る。ほとんど口頭の投稿だけが収集され、70歳を超えたマラグッツイは執筆を休み、人との交流を増やしたという傾向が見える。世界の国々で展覧会を開いた後、レッジョ・エミリアは、今度は回世界の人々を自国に招き、1990年に国際学会を開催した。『不思議の国のアリス』からの名言を借り、学会の題名を“Who am I then? Tell me that first”「私は誰、最初に教えていただきたいわね」にした。発表者の中に、マラグッツイ以外はデイビット・ホーキンズやパウロ・フレイレもいた。マラグッツイは、この3年間で人生の最後の大きいプロジェクトを準備していた。レッジョ・エミリアの知識を共有する、レッジョと世界をつなぐ研究機関「レッジョ・チルドレン」を構想していた。

この最後の時期に「子ども」に焦点を当てていた。科学はどんなに発展しても「子ども」という存在は、学者を驚かせ続ける。「子ども」を調べてみると、いつも予想できない性質を発見できる。マラグッツイは、「子ども」の意外性を教育の中に入れる必要があると述べている。また、「子どもはみんな裕福だ」と主張し、子どもの中にある可能性と潜在能力について議論をし、子どもが社会過程を変える力を持つと強調している。

最後に大学院のゼミで半年レッジョ・エミリアの歴史を勉強してきた筆者が、本書を高く評価する理由を述べる。レッジョ・エミリアの特殊の教育プロジェクトは、「短い20世紀」の中で生まれてきたが、独特な歴史と社会的背景の様子だけではなく、もう一つ重要な要素が糧となっていた。本書の多様なテキストを読んでいくと、その要素はマラグッツイという人物だと明確に伝わる。彼の多面的性格、膨大な専門知識、教育と「子ども」への深い関心が、本書のページから読み取れる。英語版の編集者のPeter Mossは、読者にはテキストが生まれた文脈を忘れないで欲しいと思い、本書のキーワードは全部イタリア語のまま使用することとした。イタリア語表現の語彙リストを備え、本文でも十分に翻訳について解説している。出来ることなら地図が3枚ぐらいあれば、イタリアの地理を全く知らない読者に歴史的な背景の説明や、北イタリアと南イタリアの違いの説明などがわかりやすくなったと思われる。それ以外は、編集者の各章のまえがきとテキストの途中に入る編集後記、各章の最後につけられている注釈のバランスもよく、内容は充実したまま、非常にわかりやすい本になっている。本書は、レッジョ・エミリアの研究者、現場の教師、保育士、そして親も、単に教育学に興味がある読者も興味深く読めるとと思われる。一読をお勧めする。